

されば泉四郎高家も木會義仲の時世なり。富樫記に、富樫介家通入道法名佛西、此の人木會殿之時、越前燈城に於て戦功を顯し、其の子次郎家經に頼朝卿加賀國を賜はるとありて、鎌倉幕府の時加賀守護職なりし故に、泉野の地邊をば高家へ宛行ひ、泉村等の地頭職なるに依つて、泉四郎とは稱せしなるべし。其の館跡は寶永元年舊蹟調書に、石川郡泉村領の内に館と云ふ所あり。昔木會殿陣場之由申傳ふと載せたる地ならん。故に館とは呼べるなるべし。石川訪古游記に、此の館跡を記載せし頭註に、按寶永地誌。調足利中葉古壘。概爲源義仲遺壘。如河北堅田城亦然。恐野人訛傳、といへり。此の説さもあるべし。尙下條にて知るべし。

○木會義仲陣營跡

石川訪古游記に云ふ。泉野右有相河原。其東爲作食倉故址。壽永中源義仲軍營地。至元龜。天正。洲崎兵庫助廢覺據此。壘壁隱然可辨云々。三州志古墟考に、泉館石川郡富樫庄泉村にあり。今の作食倉の所と云ふ。是木會義仲陣跡なりと云ふとあり。平次按ずるに、右陣營の遺跡は、寶永元年の

舊蹟調書に、泉村領の内館と云ふ處、昔木會殿之陣場之由申傳、唯今作食藏に相成。と記載すれば、寶永の頃は此の地に當村の作食藏を建て置きたりしかど、其の後作食藏をば取毀ちたり。故に龜尾記には、泉野の作食藏跡といふ處は、木會義仲の陣所也といふ。今は木の質など植ゑし官地と成れり。といへり。されば三州志古墟考に、今の作食倉の所と載せたるは誤なり。又その地を泉館といふも非なり。泉館は泉四郎高家の館跡をいへり。陣營を館といふことあるべからず。寶永舊蹟調書に、木會の陣營を館と記載せしゆゑに、三州志等にも其の誤をうけて、陣營をば泉館と記載せしもの也。又石川訪古游記に、木會義仲營蹟。在米泉村東。永祿。天正之間。土賊首領洲崎兵庫據其墟。四圍土壘尙存。高七。八尺。東西廣七十步許。南北袤九十步弱。八十五方壘壕今淤。僅可棲蛙。寛文初十郡皆置作食倉數十百所。爲春耕賑救料。天明中土民懷奸。納粟穀。做米包。不藏實米。有名無實。故墮倉。と載せたりし營蹟も、則ち泉村なる陣營にて、同蹟なり。作食倉の存廢は右の趣にて知られけり。又この營蹟に砦を構へて居住せし洲崎兵庫は、泉入道廢覺の

事なり。三州志變發餘考に、廢覺坊はもと江州の者にて洲崎兵庫と云ふ。僧蓮如の弟子となり、初め加州河北郡松根の堡に住し、後石川郡米泉に移住し、西泉・泉野等三泉を押領して、自ら泉入道と僭號し、御山の本源寺と威權を争ふ。泉野に一道場を構へ、蓮如より授與せし行基作の彌陀像を安置すと云々。

○木會義仲行軍道

源平盛衰記卷廿九壽永二年五月礪波山合戦の段に云ふ。木會は平家を追落し、黒坂峠に弓杖突、除甲に成りて扣へたり云々。十郎藏人行家は志雄の軍負色に見れば、越中前司盛俊勝に乗じて攻め戦ふ程に、木會礪並山を打破り、四萬餘騎を引率して、志雄へ向ふと聞えければ、追手敗れなん上は力なしとて、盛俊此より引返す。平家は礪並山を落されて、加賀國宮腰佐良嶽の濱に陣を取り、旗を上ぐるとて、佐良嶽山に赤旗少々指上げたり。谷々に討ち残されたる兵ども、五騎・六騎・十騎・廿騎馳せ集り、盛俊も軍兵引率して参りたれば、程なく大勢に成りにけり。源氏は左右なく追懸けず。押違へて陸地に懸りて、加賀國平岳野の木立

林に陣を取りて白旗を挙げたり。源平兩陣に白旗赤旗立ちたれ共、霞を阻て、遙なり。五月廿五日の事也云々。三位中將仰せけるは、成合の手にかゝり、安宅の渡の橋を引いて、閑に源氏を待つべかりつる者と宣へば、侍共心弱く思ひて、我先々々と藤塚・今湊・安宅を指してぞ落ち行きける。斯りければ三位中將も落ち給ひにけり。五月廿五日の夜半也云々。明くれば、廿六日安宅、湊に着き集り、橋を引き搔楯をかき陣を取る。爰にて日數を経る間に、或は水に流れたる兄弟、或は敵に討たれたる一族、永き別れを歎きつゝ、悲しみの涙を流しけり。六月一日源氏俱利伽羅・志雄山追手搦手の大將軍一つに成り、五萬餘騎引具して、安宅の渡に押寄せたり云々。とあり。按ずるに、宮腰佐良嶽山は佐那武明神の舊社地也。平岳野は得田章房申軍忠狀にも、加州平岡野に陣取と見え、今いふ金澤宮腰口なる廣岡の地をいへり。廣岡山王社記にも、古名平岡野といへり。されば此の時平家の軍勢は海濱通りを上方へ引取り、木會が軍勢は押違へて陸地に懸りて、平岳野の木立林に陣を取るゝとあれば、今いふ廣岡の地に滯陣しける處、平家の軍勢能